

佐々木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回に子供を連れて別室で参加した。あったかいものを一緒に飲むだけで、ほっとすると感じた。体験談を聞くことで希望が持てた。こういう風に将来につながっていくと感じた。子供もそれを聞いて、「自分も学校に戻れるのかもしれない」と思ったようで、そこから学校に通うようになった。グループ協議がとてもよかった。そこで友達ができた。子供同士を一緒に遊ばせるまでに至った。この会があってよかったと涙を流しているお母さんがいた。
小林委員長 事務局	<p>(3) SSR 及び SRT の効果的な活用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次に、「資料3 SSR 及び SRT の効果的な活用について」事務局からお願いいたします。 ・SSR 支援状況の小中合計を見ると、SSR での支援人数は増加傾向にある。 ・SSR に配置されている SRT だが、週2または週1で各校配置されている。来年度は、議会での予算の承認が終わっていないため、あくまで予定だが、勤務時間は4.5時間と変わらず、各校週4日の配置となる見込みである。週4日の配置となることで、さらなる SSR 及び SRT の活用の充実を図ることが可能になるかと思う。 ・本日の協議は、「週4日配置になった場合、週1や週2の配置と異なり、どんなところを充実させることができるだろうか、今できていないことでできるようになること、など効果的な活用」に向けたご意見をいただきたい。 ・協議の前に、改めて、SSR の目的や SRT の業務内容等について確認をしておきたい。SSR は教室に入ることが難しい児童生徒や、少し気持ちを落ちつかせてリラックスしたいと思った児童生徒が教室以外の居場所として過ごすことのできる部屋である。大人数だと集団に入れられない子どもが、SSR で教室とオンラインでつなぎ学習している事例もある。 ・SRT は SSR を中心に、長期欠席や不登校傾向の児童生徒などの学習及び学校生活における支援を行なっている。例えば、コミュニケーション能力育成のための SST を、人間関係の構築が難しい児童生徒に SRT が実施することも考えられる。 ・上尾市の SSR の現状と課題だが、現状として、SSR からのオンライン授業の参加、教室復帰を目指している児童生徒と SRT が1日の予定を相談しながら参加できる授業に参加、登校が難しい児童生徒への家庭訪問の実施などを行っている。課題としては、週1勤務のため人間関係の構築に時間がかかること、教職員との連携の時間がないこと、ほかの学校の活用状況の情報が足りないことなどが学校訪問や研修会で挙がってきている。
小林委員長 山田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校関係者である委員からお願いします。 ・本日は6名の利用があった。SRT が配置される金曜日になると9名ほ

小林委員長	<p>どになる。少し狭さを感じるようになった。残りの3名の生徒は、SRTが週4日間来てもらえれば、参加ができるのではないか。新たな活用ということではないか、給食を一緒に食べていただいたり、出席の管理をしてもらったり、別室で中間・期末試験を受ける生徒のために試験監督もできるとありがたい。現在は不登校の子供が14名ほどいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曜日が増えることで、活用できそうなことはないか。
山田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・今も来てもらっているときはフル稼働してもらっている。4日来てもらえるだけでありがたい。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・行事をやっている市町村もある。異年齢の活動ができる場合もある。机があると狭いが、机をなくせば広く空間を取れる。
山田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導をしてくれることがありがたい。小学校の先生が来てくれるが、小学校のプリントが教室の後ろに置いてあるので、そこから課題を取って行ってやっている。イベント的なことは教室に戻る。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・週4日の勤務を非常に嬉しく思っている。SRTが来る日しか登校しない児童がいる。週4日来てくれれば、出席も増えるのではないか。不登校児童の連絡調整もやっていただいている。不登校傾向の児童の観察もお願いしている。そこも充実できる。現在担任は、活動報告書を見て、その日の記録を確認しているが、SRTの来る日数が増えれば空き時間などで、直接話ができる。児童のクールダウンの場として利用しているの、そのあとの個別活動が充実することはありがたい。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・私が小学校に教室を作った時には、3部屋作った。一つは教室に戻ろうとしている子供の部屋。2つ目は、今にも教室や学校にいられなくなりそうな子供の部屋、3つ目は教室にいられない子供の部屋である。人が大勢いることによってトラブルがふえる。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・担任としてはSRTにどうしてもらいたい。
杉浦委員	<ul style="list-style-type: none"> ・機会が増えることが大きい。日数が増えることで、担任が空いている時間に打ち合わせができる可能性が広がる。登校刺激を与えたほうが良いと思える家庭に対して、担任が行動することは実際はできていない。SRTが家庭訪問の実施など行うことができるようになるのではないか。

門馬委員	<ul style="list-style-type: none"> ・質問があります。①4、5時間勤務とあるが、勤務の時間帯は学校ごとに決められるのか。②曜日は学校が決めるのか。③4日間同じ方が勤務されるのか。④SSTをやってもらえる方が配置されるのか。⑤施設等で予算措置はあるのか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・①学校ごとに決められる。休憩を挟むこともできる。②SRT自体が勤務が難しい曜日もある。学校と相談して決めていくことになる。③できるだけ週4日人がつくように努めている。④免許を持っている方もしくは、学校に関わっていた経験がある方となっているが得意、不得意があると思うので今後研修等で資質向上を図りたいと考えている。⑤現時点では施設面での予算措置はない。学校の予算で対応することになる。
門馬委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援をしてほしいという意見が上がった。週4日SRTが配置されるので、SSRの活用について、ルールを見直そうと話合っているが先生方一人一人のイメージの共有が難しく、着地点が見つからない。そこで、上尾市として、活用の手引きを作してほしいという意見があった。参考例を示してほしい。SSTが必要な子供が増えているので、活用を図っていきたい。
栗原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校には相談室があり、SSRとの住み分けが難しい部分がある。教育相談部会があるときに、会議に参加するため相談員が不在となる。そのため相談室を閉じなければならない。SSRが空いているとそこで学習ができる。週1回だと人間関係を構築するのに時間がかかると感じている。SRTと相談員は情報共有をしているので、予め打ち合わせをして、必要な生徒についてもらっているためありがたい。 ・西中学校もSSRのルールがないので、来年度に向けて作成していかなければならないと感じている。誰がいつSSRを使っているか先生方も把握しなければならぬと感じている。さわやか相談室の利用願いを参考に、SSRのルール作りを今後、教育相談部会で検討していく必要がある。小学校の方が活用方法を悩んでいて、学習をしに行く場所だが遊びに行ってしまうことがある。ある程度小・中で使用の仕方をすり合わせなければいけない。小学校でSSRを利用して、中学校と活用方法が違っていると一からやり直しになってしまい、子供が苦勞してしまう。そのため、ルール作りをしていく必要がある。 ・行事は、小学校はあってもいいが、中学校は相談室もあるので、うまくSSRと繋がりながら連携できると良い。

小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・私はルールを決めるときは子供達に決めさせる。教えてほしいと言われてもすぐには教えない。そうすると自分たちで考えようとする。
相川委員	<ul style="list-style-type: none"> ・週4日に増えることは良いに違いないと思っている。SRTがどんなバックグラウンドの方なのかにもよると思うが、教室に行くことが難しい子供たちが行く部屋となっているが、あそこは問題がある人が行く部屋と色がついてしまうと行きづらくなる子もいる。渋谷区でやっているNPOの活動があり、職員会議で先生方が職員室に集まっている時間の裏で、教室が空いたときに誰が来てもいい学習教室を開いている。有償ボランティアが来て、遊んだり学習したりしている。学校に来てない子もその場所だけは来ているということがある。SSRに行くことになるプロセスがどのようなところなのか気になる。
波瀲委員	<ul style="list-style-type: none"> ・SSRに行ける子もいれば相談室にしか行けない子もいる。普通の子と同じところで自分がやれないというコンプレックスがある子はそういう場所を利用することも難しく、家から出らない子もいる。SSRを使える子とそうでない子がいるので一概にこの方法がいいということは言い切れない。本人の気持ちはもちろんだが、登校できない子供を見ている保護者ももっと気持ちが落ちている家庭もある。登校できる子にとってはSSRが効果的な場所になるように学校間の差ができないようにすることがいいと思う。親同士のつながりもあると思うので、できるだけ共通でできることはしてほしい。 ・小学校から中学校に上がるときの引継ぎがどこまで行われるか。担任とSRTの共有を図るため、カルテや目標を決めて、次の担任に引き継げるようにしていけると良い。共通認識が持てるようなものがデータで引き継がれてほしい。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・私達はA4の紙に引継ぎの用紙を作っている。好んでいる活動やできる活動を書いてある。苦手な活動は大事なのだがこの子にはこのような効果があったと分かる。全校が同じようにと言っていたが、選択肢が大事である。どこの学校に行ってもいいのではないか。ほとんどの子が学校に行って、気に入ってもらえることが大切である。本人自身が居場所を作っていくことが大事である。
佐々木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の子供は勉強に苦手意識があって、SSRに行ってみようということになった。分からないことがあった時に、SRTに聞いて、勉強が分かり、自信をもって一日で教室に戻った。分からないことを質問してもいいのだと学んだようだった。小学校の子供は、SSRの入口に黒板があり、

<p>松田委員</p>	<p>今日やることを自分たちで決めて書いていく。時間によって先生が変わるので、同じ先生がずっといてくれたらと思っている。週4日SRTの先生が来てくれることは子供にとってもいいことだと思う。先生たちの負担も減るのでいいと思う。4. 5時間勤務というところが気になっていて、給食は一人で食べることがある。先生がいるといいなと感じている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室に行けない子供が通っている部屋なので、学級で行事をやるのは難しい。現在は、休み時間にひなまつりの飾りを作っている。小学校はイベントがあっても楽しいのかなと感じている。 ・担当している家庭から、SSRは拒否されたケースや利用して、保護者の顔が明るくなってきたケースもある。みんながみんな使えるわけではないということを考えていくことが必要である。保護者からの話で、子供からSRTの話は聞くが、保護者がSRTに会ったことがなくどんな人か知らないケースがあった。相談室を利用する場合さわやか相談室相談員と面談したり、担任とは面談したりすると思う。今後SRTが週4日勤務するのであれば、SRTと面談したり、担任の面談に同席したりするなど、保護者とSRTが面談できる機会があると良いと考える。 ・ルールを作る時には、子供への評価ではなく、不登校に対する成功例が載っている記述があると嬉しくなる。できないことを書いてある書類の方が多。それに対して、できた例を学年から学年へ引き継いでもらえると良い。保護者も気づくと良いし、家庭でも実施していけると良い。 <p>(4) 民間団体活用に係る助成及び補助金についての先行自治体の対応状況まとめについて</p>
<p>小林委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次に、「資料4 民間団体活用に係る助成及び補助金についての先行自治体の対応状況まとめについて」事務局からお願いいたします。
<p>事務局</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで、推進委員会でご検討いただき、前回は通うべき学校に行きたいけれどいけない状況にある児童生徒及び保護者を対象とすることを前提とし、「経済的に困窮している家庭」を対象とするのか、「民間施設等に通う全児童生徒の家庭」とするかご意見をいただいた。 ・今回は、申請方法についてご意見をいただきたい。複数の自治体の申請方法について比較すると、おおよそ次の3つの自治体による方法に分類できる。本日はこちらの申請方法の特徴をご紹介させていただき、上尾市としてどのような方法をとるべきかご意見をいただきたい。 ・(1) 東京都で特徴としては、3か月に1回、民間施設と学校が様式のやりとり等でつながることができることと申請書によるやりとりが複数回あることである。

	<p>(2) さくら市で特徴としては、自治体とのやりとりが1回のみである。</p> <p>(3) 姫路市で特徴としては、実績報告が前期と後期の2回となっていること、半期に1回の報告となっているが、学校を介して報告される様式でないことである。</p>
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・熊谷で不登校対策をやったときに、学校に対して用紙を月毎で提出し、校長、担任に回していた。スクールカウンセラーにも知らせていた。学校は子供の状況が分かるようにした。学校にフリースクールが取り組んでいる内容を伝える意図はどこになるのか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・学校との連携を密にできる申請の必要性はあると思うが手続きができない保護者もいる。
佐々木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・書類が増えれば増えるほど、間違いが増えそう。子供が不登校になっている状況だけでも精一杯になっている中で、複数人不登校を抱える家庭もある。簡単な方がありがたい。学校にも情報を共有してもらえたらよい。書類にすることで、学校が目を通すのであれば、それはありがたい。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都の報告書は作成をフリースクールで行い、保護者が学校にもっていきサインを書いてもらって行政に提出する。
相川委員	<ul style="list-style-type: none"> ・書類は簡単な方がいい。出てないと提出を促す仕事もある。連携の中身は何日と言うこともないと思う。書類を作るたびに、わが子は不登校だと実感させられる。連携に関しては、フリースクールに行っているから、そっとしておいてほしいという家庭もあると思う。連携は随時でよい。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・出席日数に関しては、保護者の依頼で初めて動き始める。親から学校に伝えるような仕組みになっている。家庭からの申し出がなければ出席日数のことを学校にお願いしなくても良い。
波瀾委員	<ul style="list-style-type: none"> ・質問であるが、どの程度利用した場合に、この方針に当てはまるのか。週1で良いのか、週5日なのか。個人で利用の仕方は変わってくる。回数線の線引きはどうなっているのか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・他市は、月に1回以上通っていれば支払っている自治体がある。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・学校としての考えはありますか。

山田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・現在一人、フリースクールから報告書をもらっている生徒がいる。報告書があれば、何回フリースクールに行っているか分かる。そうすると安心材料になる。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校は、たくさんの書類でいっぱいである。この文書はその一つになってくる。さくら市の形が良い。マストじゃなくても余力があるときには送ってもらいたい。保護者負担がないのは大事だが、だからと言って学校は何も知らない状況はよろしくないと思う。 <p>(5) 答申書(案)について</p>
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・次に、「資料5 答申書(案)について」事務局からお願いいたします。
事務局	(資料読み上げ)
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・太田委員は以前協議会の中で、ご自身の学校のSSRの環境のことや、人員が配置されたらという視点でご意見をいただきました。課題解決のための視点アとしてSSRの支援の充実に向けての内容が記載されていますが、学校適応指導教室のことも踏まえなにかご意見はございますか。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に対するSSRの周知は、具体的に実施しているか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・協議会の中でも上がってきたが、保護者に伝わっていないことがたくさんあった。まずは周知自体の仕方の検討が必要である。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・校長会でも教育長から保護者に周知することが大切であることを指示された。保護者への周知も実施すべきである。他の部分も適切である。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・SRTに対する研修はとても大切である。特にアサーションが大事である。したくないことはしたいと言えることが大事である。上手に断れること、困ったら助けてと言えることだけでも、不登校は減る。高校生が中学生の時にアサーションを教えてほしかったという意見があった。これを知っていればその時変わったのにといい意見をもらった。
山田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・書いてある通りで良いと思う。
相川委員	<ul style="list-style-type: none"> ・端的にまとめられている。ウの当事者の方向けに体験が聞ける機会が大事だと思っている。不登校である当事者の方も外に出られないかもしれ

	<p>ないが、インターネットでも繋げられることが大事である。年に3回だということだが、4か月ペースで次回まで待たなければならない。そこまでのつながりを誰がどのようにやらなければならないのか。保護者だけではなく、当事者本人のアクセシビリティの部分を入れるとよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アサーションの取組みについては、ピアサポートの際に行っているが、「もっと早く知りたかった」という意見が多かった。助けてと言っている、断ってもいいということを知らせることが必要である。 ・ユニセフが出した日本の子供の幸福度は、「親子の会話の時間か少ない」が38位、「友だちをすぐに作れない」が38位であった。友だちが作れないことはピアサポートだと思うので、それを何とか学校の中に取り入れて、友だちができやすくする何かができるといいと考えている。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・視点のイに関していかがでしょうか。
杉浦委員	<ul style="list-style-type: none"> ・民間施設もいろいろ出てきて、メタバースやフリースクールに通っている子もいる。直接話をしていないと分からないこともある。これから先、新しいフリースクールも出てくるかもしれない。課題がある家庭の場合、フリースクールに魅力を感じていない家庭もある。補助金の支援があれば、変わるかもしれない。平等と公平に関しては、今後も調査検討していく必要がある。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・波瀲委員は第2回の経済的支援の協議の中で、収入に応じた補助を検討する必要もあるとご意見いただきました。民間施設等を利用する児童生徒の保護者への経済的支援について、内容が記載されておりますがいかがでしょうか。
波瀲委員	<ul style="list-style-type: none"> ・民間施設等というものをどの範囲までを含んだ形で言っていくのかまだまだ検討が必要であると感じた。一回いくら、月いくら、週1回だけ登校させるところもあり、様々なので、いろいろなことを想定してやっけないといけない。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局として今のところはいかがですか。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会でも、保護者に対しての支援なのか、施設に対しての支援なのかというところは以前協議した。保護者に対しての支援の方がいいのではないかという意見は出ている。外に出ることもできない子もいる。波瀲委員が言う通り、様々な範囲を想定していかなければならないと考える。

太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・イ の後半は保護者の支援になっている。保護者支援として、くくり方を変えると分かりやすくなるのではないか。
相川委員	<ul style="list-style-type: none"> ・先ほど私がお伝えした「こども達の居場所づくり」「ピアサポート」に関してはアに加えさせていただければと思う。
栗原委員	<ul style="list-style-type: none"> ・SSR の周知を学校がどのようにやっているのか分からないが、上尾市が学校適応指導教室の周知をしている。ゴールデンウィーク明けなど年間通して不登校になりやすい時期があるので、何回送られてきてもいいと思う。今、窓口をまとめたものが上尾市にはある。いつもは目を通してなくても、子供が不登校になった時に目を留めてもらえる。市として一括で、周知の回数を増やしてもらえると良い。
小林委員	<ul style="list-style-type: none"> ・課題ウの保護者への支援が必要であるということから、課題解決のための視点として、ウ保護者に向けて不登校について語り合う会の開催について明記されております。この点について、松田委員は、パネリストを招いての開催についてご意見されており、視点にも明記されておりますが、ご意見いかがでしょうか。
松田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校支援は保護者支援が必要である。先ほど、お子さんが SOS を出せるようにという話があったが、保護者が自分の意見を言える場、保護者支援の場が必要である。低学年、中学年、高学年、中学生のステージの中で、異年齢の情報をキャッチすることは必要である。その話を聞くことで、膠着している胸の内の振り返りができる。今回はお子さんの立場から、「大人はこういうけど、自分はこうだった」という話が聞けたので良かった。
小林委員	<ul style="list-style-type: none"> ・カウンセリングに来ている保護者、適応指導教室に来ている保護者に月に1度、ハイブリッドで保護者会を開いている。保護者会で母親から聞いた話の中で「些細なことだが近所のコンビニへ子供を買い物に行かせたら買い物ができなかった。」ということがあった。その話をしてくれたのが嬉しかった。実際に関わっている大人が子供の変容を伝えてくれるのはありがたい。SSR が掴んだ情報を担任が知っておくのは大事である。
門馬委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ウに関して、この記載通りだと思う。回数を重ねるごとに充実しているのだと感じた。参加者のリクエストを踏まえて内容を検討すると良い。SSR の周知の場だが、全校生徒宛に出したさくら連絡網は8割しか開いていない。再送しても開かない家もある。再送の仕方も、自動再送にしていると画面のトップには出てこない。周知の仕方はうまくいく方法を上尾市

	<p>としても取り入れていく必要がある。また、当事者の方の話をオンデマンド配信でやっていくのも一つである。</p>
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンドは不特定多数に広がっていく可能性がある。
佐々木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ア保護者に対する周知、学校から知らされなかった不信感もあった。いっぱいいっぱいだったときは、情報を見ることもできなかった。私より情報が届いていない方もいる。少し手をのばせば情報が入るようにしていただきたい。 ・ウは、1人じゃないと感じた。保護者が不安であると子供にも届かないと思う。交流の場を求めている母親も多そうであった。例えば、ご飯をどうしているかという話である。私は、子供が食卓に降りてくるよう工夫を凝らしたご飯を呼びかけ、共に食べられるようにしている。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の視点と提言を紐づけるのであれば、保護者への支援の充実に項目を立てて、提言を移動する必要がある。
相川委員	<ul style="list-style-type: none"> ・これを教育実践にどう具現化していくかが大事である。活用ができるようになると良い。
	<p>2 諸連絡</p> <p>○閉会のことば</p>